

1. はじめに
2. 図書館を扱った小説——2024 年の事例
 - 2-1. 『ちゃっけがいる移動図書館』
 - 2-2. 『虹いろ図書館 司書のぼくと運命の一年』
 - 2-3. 『銀河の図書室』
3. テレビドラマ『海のはじまり』
4. おわりに

1. はじめに

受賞作に生成 AI を使用したとの発言が話題となった、1)「第 170 回 (2023 年下期) 芥川龍之介賞」の受賞者、九段理江は、『週刊文春』掲載された、阿川佐和子によるインタビューで、埼玉県と浦和市からの表彰を受けたことに続けて、「埼玉は図書館に力を入れていてそこは誇れるところですね。私もその恩恵に与ってきました」「図書館が好きだったんですか」「めちゃくちゃ通っていました。図書館マニアというか、旅行に行ったら必ずその旅行先の図書館に行くし、家を探す時も図書館の近くがマストなんですよ」という会話をかわしており「小学校の図書室の本は大体読んでいました」と述べている。2)

また、同じ芥川賞の受賞者で、現在でも最年少での受賞者である、綿矢りさ、は、上記とほぼ同じ時期に刊行された雑誌のインタビュー記事で、「運動があまり得意ではなかったの、家の中にいて本を読むのが好きな子供でした。図書室や図書館、古本市にもよく行って」「当時は、本に助けてもらっていた感覚があります」「高校の図書室に日本の近代文学の全集があることに気付いて」「有名どころの有名作品を読むようになったんです」と語っている。3)

雑誌の売り上げ低下が指摘されて久しい現在でも、刊行が継続され、2025 年 2 月号で、創刊から 500 号を迎えることとなった、4) 書評や本の内容紹介をメインの内容とする、月刊誌『本の雑誌』では、2024 年 10 月号に「特集 国立国会図書館で調べ物を」が掲載され、5) さまざまな立場から、国立国会図書館の利用体験が語られている。なお、この雑誌では、これ以前にも、特集で図書館を取り上げた号が、1993 年と 2014 年の 2 回、刊行されている。

日本文学の代表的な文学賞の一つである芥川賞を受賞している作家が、読書との関係性を深めるきっかけとして図書館をあげており、また、数十年にわたって継続的に刊行されてきた文芸関係雑誌が、図書館を特集する記事を掲載しているということは、現代においても文学との関係性において、図書館が一定の存在意義を有している、ということを示している

といえるのではないか。

注

1) 「第 170 回芥川賞に決まった九段理江さんが、受賞作を「チャット GPT のような生成 AI を駆使して書いた」と発言したことが議論を呼んでいる」のように報じられた。

「芥川賞作家・九段理江さん『受賞作の 5% は生成 AI の文章』発言の誤解と真意、AI ある時代の創作とは」『東京新聞』2024. 2. 18

<https://www.tokyo-np.co.jp/article/310036>

2) 「阿川佐和子のこの人に会いたい」『週刊文春』2024. 3. 28、pp. 112-117

3) 「令和版 解体全書 最終回 綿矢りさ」『ダヴィンチ』2024. 4、pp. 50-55

4) 『本の雑誌』2025 年 2 月号 「特集 500 号記念号」

上記の「本誌特集リスト座談会」(pp. 23-34)によると、1993 年 2 月号で「理想の図書館」、2014 年 4 月号で「図書館を探検しよう」、2024 年 10 月号で「国立国会図書館で調べ物を」というテーマでの、図書館に關係する特集が掲載されている。

5) 『本の雑誌』2024 年 10 月号 「特集 国立国会図書館で調べ物を」

小林昌樹「国会図書館は「国民の図書館」なのだ」 pp. 12-15

平山亜佐子「国会図書館、わたしの場合」 pp. 16-17

すずきたけし「国会図書館イラストルポ」 pp. 18-19

牟田都子「私の国会図書館体験！ 「たった一冊」と対面できる場所」 p. 20

田中すけきよ「私の国会図書館体験！ クレジットなしイラスト探索の罫」 p. 21

真田幸治「私の国会図書館体験！ 小村雪岱雑誌挿絵リスト」 p. 22

V 林田「私の国会図書館体験！ 麻雀漫画誌ローラー大作戦！」 p. 23

白峰彩子「おもしろくてためにならない話」 pp. 24-25

山本貴光「デジコレの楽しみと危険について」 pp. 26-28

「本の雑誌創刊号を探しに行こう！ おじさん二人組 + 2、国会図書館に行く！」 pp. 29-

31

麻田江里子、柴山浩紀、竹田純「人文編集者座談会 国立図書館に名前を変えよう！」 pp. 32-39

穂村弘「続・棒パン日常 図書館の記憶」 p. 56

「編集後記」 p. 144

2. 図書館を扱った小説——2024 年の事例

従来からあったが、これまでに刊行されている作品でも図書館を扱ってきた作家が、今年になって発表した小説で、図書館が扱われるケースが 2024 年にも、いくつかみられた。こうした中には、作者が図書館の勤務経験があったり、図書館関係者に取材するなど、現在の

図書館の実態をふまえた描写になっているものが含まれている。

2-1. 『ちゃっけがいる移動図書館』1)

『ちゃっけがいる移動図書館』は、移動図書館に勤務する非正規の女性職員と、彼女が、あずかることになった子犬の「ちゃっけ」との日常生活と移動図書館での日々を扱ったストーリーである。作者の高森美由紀は、自ら発信しているwebページで、図書館に勤務していたことがあり、移動図書館の業務にも対応していたことを明かしている。2)

また、高森美由紀は、2017年に刊行された『みさと町立図書館分館』3)で、図書館に勤務して「三年目の契約職員」(p. 6)で、年齢は「三十三です」(p. 98)という女性の「山本遥」をメインキャラクターとする作品を発表しており、この作品については、本誌に掲載した論考の中で扱っている。4)

◎町立図書館の移動図書館と職員体制

『ちゃっけがいる移動図書館』の設定は、町立図書館の正規ではない職員をメインとした『みさと町立図書館分館』と共通する要素もあるが、『ちゃっけがいる移動図書館』では、タイトルにあるように、おもに移動図書館での日常が描かれている。

『みさと町立図書館分館』では、架空の地名の「みさと町」について、それ以上の具体的な説明はなかったが、『ちゃっけがいる移動図書館』は、「青森県に位置する三津町」(架空の地名)の「約二〇〇〇冊の本を積んだ移動図書館バス」(p. 5)が、主な舞台となっている。

また、『みさと町立図書館分館』では、メインキャラクターである「三十三」の女性「契約職員」「山本遥」のほかには、役場から異動になった「二十代後半の男性職員、岡部さん」と「三十代半ばの女性」で「唯一の司書資格保持者である香山さん」が分館の職員であり、「図書館長は本館に常駐している」(pp. 28-29)という設定になっていた。一方、『ちゃっけがいる移動図書館』では、主に移動図書館での日常が描かれるが、「三十五」の独身女性「非正規職員」「小田切^{みのり}実」(p. 7)、元館長で移動図書館の運転を担当する「和田肇さん」(p. 18)と、「三〇歳前後」の男性の役場職員である「司書の佐藤諒太さん」(pp. 18-19)、からなる三人が移動図書館の業務に対応している。それ以外に、町立図書館の図書館長やほかの図書館職員も登場する。

ふたつの作品とも、正規職員ではない三十代女性が、ストーリーの中心となっているが、『みさと町立図書館分館』では契約職員の待遇について「時給七百円」(p. 29)であるとされ、『ちゃっけがいる移動図書館』でも、『給料は低いです』(p. 57)、『給料なんてよくないよ。非正規なんだから』(p. 119)と、いっている場面がある。

◎非正規職員としての業務対応

「青森県に位置する三津町」の「約二〇〇〇冊の本を積んだ移動図書館バス」(p. 5)に勤務している非正規職員の「小田桐実」は、大学卒業後「会社に正社員として就職したが、辞

めて図書館の非正規職員になった」。(p. 14)「元々は館内業務担当だったが、先月、移動図書館担当への配置換えの辞令を受けた。前任者が心の病気になって辞めたためだ。その人も、非正規の女性だった」という。(p. 17)

昼休みに事務室で、弁当持参で仕事をしていると、『仕事熱心ですね』『手が足りなかったら助太刀しますよ』佐藤さんにいわれ、大丈夫です、と答えるが、「熱心なわけあるか」「やらねば更新してもらえないからやってるだけだ。それを、熱意を注いでいると善意に解釈されるのは心外だ」と思っている。(pp. 19-20)「非正規は一年ごとの更新制だ。更新されない場合もちろんある」という状況で、『そうになったらそうなったで仕方ありません』『そういう契約ですから』と発言している場面もある。(p. 32)

移動図書館のバスは、佐藤さんが『来年度は廃車にしようかって案が出てもしょうがない』と言っているくらいにボロいもので、車検が通りづらくなっていて、部品を調達するのも難しいと聞き、小田切実は、そうになったらどうなるのか、『本館勤務から移動図書館に移るように言われてきた』『移動図書館がなくなるのと同時に契約更新もなくなる』のか。『現時点で本館業務が回っている』のは『人は足りているということ』なんじゃないか。と不安になる。佐藤さんは『移動図書館の利用者が増えれば、考え直すんじゃない』か、と言うが、小田切実は『正規の職員さんにとっては所詮、対岸の火事ですよ』と感じている。(pp. 178-179)

◎利用者への対応——トラブル事例

a. 五冊以上借りたいという男性

「バスの反対側から、強い調子の声が聞こえてきた」。男性職員の佐藤さんが対応していたが、助けを請われる。「体格のいい年配の男性が重ねた本を抱えて顔を真っ赤にしていた。つばを飛ばして佐藤さんを怒鳴りに怒鳴っている」。小田切実は、一〇冊借りたい、という男性に、『五冊という決まりです』とキッパリ告げる。「こういう輩にはキッパリと断らないと、要求がエスカレートしてくる」ので、一〇巻シリーズの時代小説を一気に読みたいという利用者に、小田切実は『五冊と決まっているんです』と告げると、男性は名札で、臨時職員であることを確認し、『まっとうな職員でもねえくせしてえっらそうに』『こっちは税金払ってんだ』と言われるが、『ここの本は、町の皆さんが払ってくださっている税金で買ったみなさんの本です』と小田切実が言い返し、館長経験者の和田さんがふたりをとりなす。押し問答をしていると、小学生の男の子と未就学児の男の子が、シリーズものの一部を借りる手続きをして、『ごめんね、シリーズを一気に貸してあげられなくて』と言い、和田さんがおじさんに頭を下げると、結局、この男性は本を借りないで、憤然と立ち去った。小田切実は「子どもでもルールやマナーを守っているのに、なぜ大のおとなができないのか」と思う。(pp. 27-30)

図書館に戻ると、館長から呼び出され、『苦情が来てますよ。移動図書館でつけんどんな対応をしたそうですね。態度が悪いとお叱りの電話をうたきました』と言われる。ル

ールを逸脱するサービスを求められ、特別扱いするわけにはいかなかったと説明するが、館長は『「ルールはいいとして、それを伝える方法や態度は改めてもらねばなりません』』と言い、『「あなたは、司書資格がないのでしたよね』』『「ここで働けるなんて運がいいですね』』『「これからは油断していると席を奪われかねませんよ』』『「図書館によっては非正規の方を年度ごとに、新規応募の人も含めて面接するということも出てきたようですから』』『「図書館としては、司書資格を持った人にはいつてきてほしいところですから』』『「とにかく、立場をわきまえてください』』と告げる。(pp. 32-34)

b. 返却期限を延長したいという女性

「バスの向こう側から、女性の感情的な声が聞こえてきた」。「本の返却期限を延長したい」という女性に対して、佐藤さんが「予約の入っている本の返却期限の延長は不可という説明と説得を試みている」。女性は納得できないようで、小田切実は暗澹たる思いになるが、『「なるほど、わかりました』』と一旦は受け入れると、女性の表情が、若干ほぐれた。『「申し訳ございませんが、延長は難しいです。ですが、おなじ内容の本をご紹介します』』と言って、書架から本を取って紹介すると、そちらを借りていつてくれた。その後、佐藤さんに『「やっぱり司書資格とりませんか』』と言われ、小田切実は『「考えてみます』』とこたえる。(pp. 195-197)

c. 本が返却されない

小田切実が、子犬を散歩させている際に出会った「角刈り頭の」男性が、本を借りたいといつてきて、利用者カードをつくる。「五〇年近く前に読んだ」「絵本」で「家の本」をみたいと言う。覚えていることとして、『「表紙にはでかくて白い丸が描かれていた』』『「煙突のある赤い家があったはずだ』』『「畑の中の一軒家が都会の町に行く』』などの話を聞いて、小田切実は、書架を探して、「バージニア・バートン作『ちいさなおうち』」を差し出すが、『「表紙は緑だった気がする』』『「右に開くタイプだと記憶している』』と言われる。それを聞いていた佐藤さんが、携帯電話の画面に表示させたものを提示して、『「これですか?』』と聞くと『「そうだ、これだ!』』となる。佐藤さんは『「ちいさいおうち』』は何度か改訂されている、と話し、男性は、『「改訂ってものがあるのか』』『「あんたらすごいなあ』』と言ってこの本を借りていく。『「小田切さんってレファレンスもできるんですね。見直しました』』『「わたしも佐藤さんを見直しました。私、改訂に思い至りませんでした』』という会話を交わす。(pp. 151-157)

こうして貸し出された絵本だったが、期日までに返却されず、督促の電話もつながらない。(pp. 158-159) のちに、警官が『「ちいさなおうち』』もって図書館へやつてきて、この男性が孤独死していたことを知らされる。絵本は、「茶色く染まり、ページが波打って全体が膨らんでいる」といった「手の施しようがない」状態で「除籍となる」。「他の図書館職員らは除籍となることに対し、移動図書館チームの管理の問題だと批難した」。「本を無駄にした」「もっと早い段階で」「働きかけ、返却してもらえていたら除籍にはならなかった。その努力を怠った」との指摘に、小田切実は「やるせなさや空しさ」を感じた。(pp. 175-176)

◎「ちゃっけ」という子犬

移動図書館の活動中に「ガードレールの下から、なにかがとてとてと路上に出てきた」のは、「お腹と四本の足の先は白いが、それ以外は茶色の和犬」(pp. 41-42)で、里親が決まるまで、小田切実が子犬をあずかることになる。動物病院で、カルテを作るのに名前が必要とのことで「小さいという意味の方言で『ちゃっけ』と名付けた。(p. 45)

移動図書館に乘せることについては「和田さんが役場の上役と館長以下に打診してくれたおかげで実現できた」。(p. 100) 会場に連れていくと、「ちゃっけに気づいて立ち止まり、ついでに本を借りていってくれる人もいる。その中の半数は利用登録してくれる」「ちゃっけに犬用おやつを与える人もいる」(p. 130)。なにかの違反になるんじゃないかと、佐藤さんは心配するが、和田さんは「『いいんでないかいかい』といい、佐藤さんが「『ちゃっけは正職員じゃないですもんね』」というと、小田切実は「なんの気なしだと思われるが気持ちに負荷がかかった」(p. 130)。

「それまでプライベートなことを口にしなかった人が、ちゃっけを見て自分も犬を飼っていることを教えてくれるようになった」「犬が登場する小説を読みたいとリクエスト」があり、それに対応して本を貸し出した、というシーンもある。(p. 195)「利用者数も新規登録者数も増えていた。犬を連れてくる人もいて、飼い主同士のつながりも生まれている」「犬がいる図書館として利用者に馴染んできた」「来館者同士が知り合いになっていくと無茶な要求をしてくる人や高圧的な人も減った」という状況にだった。子犬の存在による好ましい影響も感じられるようになっていたが、館長から、「『図書館バスに犬を乗せるな。かむかもしれないし、不衛生だ』という投書が届いたので、あの雑種犬は今後乗せないでください」と言われる。小田切実は、統計をみれば、「『犬がいたから利用者数が伸びた』」ことがわかると主張するが、館長は、「『そうとは限らない』」「『あなたのその態度はいかがなものでしょう』」「『あなたが納得するしないは関係ありません』」といわれる。(pp. 222-223) その後、移動図書館では、「多くの人からちゃっけがいない理由を尋ねられた」「職員は『犬が苦手な人もいらっしゃるの』と説明した」。「落胆してさっさと帰る人たちが続出する一方で、苦手だった犬がいないのは気が楽だと明かす人もいた」(pp. 225-226)という。

この小説の末尾では、里親が決まって、いったんはそちらにもらわれていくが、(p. 253-254) 結局、小田切実のもとへ、戻ってきてしまう。(p. 264)

◎前任者の川口さん

小田切実は、「元々は館内業務担当だったが、先月、移動図書館担当への配置換えの辞令を受けた。前任者が心の病気になって辞めたためだ。その人も、非正規の女性だった」という、この女性は「移動図書館のほかに、企画ものや事務仕事もやっていた」が、「影の薄い人」で、「正規職員なら、なにかあれば長期間休め、給料も出るが、非正規にはそういった手厚い保証はない」(pp. 17-18)。

川口さんは、「図書館バスの前任者で、心の病気のために辞めた非正規職員」(p. 197) だが、移動図書館へやってくる。『私がいた時より、移動図書館の利用者は減ってるでしょう?』『徐々に増えてますよ』というやりとりのあと、ちゃっけについて『この犬はどうしてバスに乗ってるんですか?』『移動図書館に同行しても許されるような特別な犬なんですか?』『よく町が許可しましたね。来館者が増えているのだとすれば、犬の効果なんじゃないですか』『人気あるんですね』と言って、『いいように使われてるだけよ。一生懸命働いたって、病んだらおしまいなんだから』と、ちゃっけに話しかける。小田桐実「都合のいい条件で働かされ、来年度も雇ってほしくて懸命に働き、そこで無理がかかる。壊れるのは自明の理で、壊れたところで保証はない。壊れたら切り捨てられるだけ」(pp. 200-201) と思い、以前の職場ではリストラが進み、余裕がなくなって体調を崩して「体調が悪化しきる前に速やかに退職した」(p. 202) ことを思い出す。

後日、小田切実は、川口さんと図書館の休日である月曜日、ちゃっけと散歩に出ている時に再会し、『私は仕事を続けたかった』という川口さんに、小田切実『私は働きたくなかったです。でも今は働きたくないという気持ちが薄まっています』と言い、『非正規の立場を受け入れたんですか?』『受け入れてはいないです。全く考えないわけじゃないですが、前ほど非正規であることへの不満を意識しなくなりました。正規非正規もさることながら、その根っこにある仕事やお金だけにフォーカスしなくなりました』という会話をしている。そのきっかけは「意識を向けるものが他にできたことです」と尾をふるちゃっけを見て、目で頷く。(pp. 240-241)

◎母親との電話での会話

非正規の職員として図書館で働いている小田切実が、母親が電話で話している場面では、現状に対して母親から、さまざまな批判を浴びており、『努力が足りないから結婚もできず出世もできない』『その年で独身で非正規なんて恥ずかしい』『どうして努力してその立場から脱しようとししないの』と言われても、「努力したところで、私は正社員だの正職員になれない」と思う。『すべて自分が招いた結果』だと母親には言われるが、「就職活動時期、市場は冷え切っていた。履歴書を送ってもはじかれ続けた」ので、父の紹介で就職したが、やめることになってしまった。「だいたいのはあきらめてきた。ほしいものはない。期待はしない。望みはしない」と考えている。(pp. 96-97)

別の日には、やはり、母親との電話で、『一生一人でいるの』『それでやっていけるの』『非正規ってことはなんの保証もない』『あなたの代わりはいくらでもいるってこと』『そこにはあなたの居場所はないってこと』『非正規じゃなにを契約するにも渋られるでしょ』のように責められ続けている。(p. 135)

◎非正規雇用と司書資格

小田切実は過去に、図書館とは別に資格取得を考えていたこともあり、部屋には「資格取

得のためのテキスト」や「業界誌や求人誌」「挑戦しようとしていた資格試験のテキスト」などがあり、取れた資格をもってして再就職先を探したが、いずれも不採用」だった。「就きたい仕事というものはない」「どんな仕事でもいい」。資格があれば「正社員や正職員に滑り込める可能性も高まるだろう」と考えて「取得してみたが、無駄だった」。(pp. 8-9)

商業施設の移動図書館会場で、ビブリオバトルの本を探しに来た子どもに本を紹介すると、佐藤さんに『小田切さんもプレゼン、できるんですね』と言われ、和田さんから『司書資格取って見たら』と勧められる。『私はいいですよ』『資格を取っても非正規は非正規ですから』『癖のように口から出てしまう。そういう言う自分にげんなりする。げんなりするということは、そういう自分でいたくないと思っているのだろうか』と小田切実を考える。『資格があったら、更新の時も有利』『ずっとここで働けるかもしれない』『通信もあるので働きながら取れますよ』と佐藤さんは、言ってくるが、必ずしもそうとは限らない、館長は自分のことが気に喰わない様子だから、「資格さえあれば安泰というわけにはいかない」と小田切実を考える。和田さんは、役場職員には部署替えもある、と言い、ないよりはマシかもしれない、三津町立図書館じゃなくても、資格は使える、と実は考える。佐藤さんは、よかったら自分が使っていたテキストをあげますよ、と言い、「その時はよろしくお願いします」と回答する。(pp. 133-134)

物語の最後で、小田切実は、佐藤さんに『前におっしゃっていた司書資格の件ですが覚えていらっしゃるでしょうか?』と問いかけ、資格を取ることにについて『テキストを見てから検討します』と伝える。資格取得について、佐藤さんは『利用者さんからしたら、正規も非正規も関係ないですからね。小田切さんが持てれば利用者さんの利になります』『司書資格を持てたら非正規切りに遭いにくくなる』と言うが、『それは薄給でずっと使われるということじゃないでしょうか』と実は発言する。(pp. 265-267)

『ちゃっけがいる移動図書館』は、同じ作者の『みさと町立図書館分館』と同様に、小規模な町立図書館を舞台としているが、本作は、移動図書館での日常を描いている。非正規の女性職員という状況は、作者の高森美由紀の置かれていた現実と、一部重なるところもある。利用者とのやりとり、母親との電話、前任者（川口さん）との会話、同じ職員の佐藤さんとのやりとり、などを通して、非正規職員の置かれている状況や、やり場のない怒りや厳しい現実が描写されている。

そんな展開の救いとなっているのが、移動図書館の業務中に出会い、小田切実が気づかることになった子犬の「ちゃっけ」である。最後の場面では、里親が決まって、よそにもらわれていくが、結局、そこからまた、小田切実のところへ戻ってくるシーンは小説のハイライトでもある。

注

1) 高森美由紀『ちゃっけがいる移動図書館』中央公論新社、2024

この本の奥付には「1980 年生まれ。青森県出身・在住」と記述されている。

出版社のホームページでは、「小田桐実、三十五歳。図書館に非正規職員として勤務。将来の夢はない、貯金もない、結婚もできない。そんな、ないない尽くしの毎日が、子犬を拾った日から激変する!?青森×図書館×可愛いわんこの感動物語!」と紹介されている。

<https://www.chuko.co.jp/tanko/2024/08/005818.html>

2) 下記のwebページでは、「移動図書館をご存じの方もいらっしゃると思います。図書館の本をバスに積んで町内の各地に赴き貸し出しする図書館業務です。私も図書館勤務当時はやっていました」としている。

「ちゃっけがいる移動図書館」『HatenaBlog 高森美由紀な日々 2024. 8. 20』

<https://takamoriyuki.hatenablog.com/entry/2024/08/20/120000>

3) 高森美由紀『みさと町立図書館分館』産業編集センター、2017

この本のカバーに「1980 年生まれ。派遣職員。青森県出身、在住」との記述がある。

下記の三戸町立図書館のホームページには、「ブックリスト」で、「「2017 年集英社ノベル大賞」を受賞した三戸町在住の小説家、高森美由紀さんの著作リストです」として、29 点紹介されている

<https://www.lib-finder2.net/sannohe/;jsessionid=9005EBF8F2F11AD4581EFE6B1C0DC398>

4) 佐藤毅彦「図書館の雇用形態の多様化は、フィクションの作品でどのように扱われているか——事例研究『みさと町立図書館分館』『図書館は、いつも静かに騒がしい』を中心に」『甲南国文』vol. 66、2018. 3

<https://www.konan-wu.ac.jp/~nichibun/kokubun/65/sato2018.pdf>

2-2. 『虹いろ図書館 司書のぼくと運命の一年』1)

櫻井とりお、による「虹いろ図書館」シリーズは、2019 年から、5 巻刊行されてきたが、

2) 本作品は「大人気シリーズ感動の完結巻」ということで、表紙には、これまでのストーリーの中に登場してきたキャラクターが描かれている。図書館が「指定管理制度」での運営に移行する直前の一年間の状況の中で、さまざまなキャラクターたちと、犬上さんをはじめとした、図書館に勤務する職員との交流が扱われている。本書の奥付に記された著者略歴では、このシリーズの他の著作と同様に、「都内区役所在職中、およそ 10 年間公立図書館で勤務」「(20) 20 年度まで非正規職員として関東圏の公立図書館に勤めた」と記載されている。

◎指定管理者制度

犬上さんの後輩で、図書館から市議会事務局に異動した高橋さんは、「『指定管理者制度とは、図書館とか公民館とかの公の施設を、ほかの団体、多くは民間の会社に任せること』であり、『民間会社の方が効率的に運用できるから安く上がるっていうけど、それって、単に給与を安くするだけ』で、『最低賃金すれすれで雇った人たちに』『同じ仕事をさせるつもり』だ (p. 11)、と言って『市の職員の中には、全然別の部署からやって来て、図書

館の仕事を何も知らない人もいる』が、『熱心で優れた司書は大勢いる』のに、『今までの努力や経験の蓄積を。軽く見たり無視したり』はないだろう、と抗議する。このような意見に対して、先輩職員の霜月さんは『そんなのどうでもいいって上が判断したんだ』『市民の皆様、大事な大事な納税者の皆様は、図書館なんてどうでもいいって、判断し』た、と話している。彼は指定管理者制度の話が出てすぐに、いろんな会派の議員さんに会いに行っていた。犬上さんも「組合とか勉強会で、抗議したり意見書は送った」が、現在は「通常業務と並行して、指定管理者へ確実に仕事を引き渡しできるように、事務や事業を全部洗い出して、マニュアル作ったり、研修したり」しなくちゃならない。(pp. 12-15) そのため、最後の年に「ほかの部署にいたベテランの元図書館員たちが、多く図書館へ呼び戻された」(p. 16) という。職員体制に関して、「今年度の新任館長」は、「来年、定年退職予定の小柄な男性」で、犬上さんが講師を務めた「専門研修の研修生」だった。「図書館の仕事は初めて」で、本の配架場所について、犬上さんに尋ねている。(pp. 25-26)

図書館が指定管理者への運営に移行するということで、司書の職員がその準備に対応する必要に迫られていることが描かれている。また、こうした状況の年でも、この分館の館長は、来年に「定年退職予定」の男性であり、図書館が行政組織の中で、どのようにみられているかを反映したような状況になっていることが、ストーリーの中でふれられている。

◎運営体制の移行と今後の展望

新年度になっても「図書館が消滅するわけではない、ぼくら今の職員は、異動するがクビにはならない」「図書館の運営制度が変わるのはずっと前から決まっていたこと」(p. 229) である。三月最後の土曜日、図書館では子供対象の行事が開催され、それが終わって打ち上げの席で、犬上さんが「新人のころさんざん振り回された」「当時は小学校六年生だった」女の子が、『指定管理者の図書館員として、研修を受けている』ということ霜月さんが話題にする。三月に大学を卒業して、『図書館で働きたくて司書資格』をとった、という。非正規の図書館員の待遇については『納得済み』で、『給料、時給に直すと、居酒屋のバイトの半分くらい』『でも、図書館の仕事やってみたいから』ということだった。研修の講師を担当した霜月さんは、研修生が『熱心で礼儀正しい』『知識もあって飲みこみも速い』『ほとんどの子が四大を出て司書資格持ち』『若い人も多い』『みんな図書館や本が大好き』であると語っている。(pp. 239-240)

そして、さらに、霜月さんは、来年度からの指定管理者制度は避けられないが、ずっと続くべきではない、として『図書館の本質は積み重ねそのものだ。資料やサービスを積み重ね守り、継続させる仕事だ』『指定管理者制度では、職員がいくら優秀であっても積み重ねの仕事はできない』『長期に続けられる待遇ではないし、一年や半年単位で、職員が自治体をまたいで異動する』『契約更新に会社がビビって現場の意見はちっとも上に届かない』と、この制度の問題点を指摘する。そんな制度がまかり通るのは、『図書館の仕事や役割が。世間に理解されていないから』ということで、自分たちは公務員だが『勉強会メ

ンバーや図書館出身者だけでなく、外の市民グループとも連携して』広報活動をする
ことを提案する。ほかの職員からも、指定管理者制度をやめて直営にもどした自治体は複数ある
こと、図書館の元職員たちや市民グループでNPO法人作って、指定管理者に選ばれた事例も
あること、などが紹介され、『『自宅で文庫活動を始めた人』で、子ども食堂や育児相談室
など、幅広く活動して、市議ともパイプのある人をこの席に読んでいることを告げる。
(pp. 242-243)

指定管理者制度導入直前の1年間の1年間が描かれており、犬上さ案をはじめとする図書館職員
と、これまでのストーリーに登場したキャラクターの後日談がちりばめられている。図書館
の運営形態の変化については、これまでに刊行された巻でも触れられてきたが、本書の結末
部分では、その問題点の指摘と、職員である司書のメンバーが、今後の活動の方向性に展望
を見出すところが扱われている。現実には、指定管理者制度の導入以降、問題点が生じて、
運営が変更された例がないわけではないが、問題が生じて、そのまま、指定管理者による
運営が継続されているところも多い。登場人物の発言にあるように、熱心で優れた司書は大
勢いるのに、今までの努力や経験の蓄積が、軽無視され、行政部局や市民が、図書館なんて
どうでもいいって判断した、ことから生じた運営形態の変化について、状況が変わらないケ
ースが多いのも確かである。

注

1) 櫻井とりお『虹いろ図書館 司書のぼくと運命の一年』河出書房新社、2024

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309039305/>

出版社のホームページでは、以下のように紹介されている。

「来春から他部署へ異動することになった図書館の職員たち。司書として最後の一年を
精一杯働く犬上さんのもとに、学校に行けなくなった火村ほのかが現れて——。大人気シリ
ーズ感動の完結巻！」「図書館外への異動が決まった司書の犬上さん。かつてのぼくみたい
な子どもを見つけないか、その子がさびしいなら、そばに立ってほしい。最後の1年の間、ほ
のか、スタビーズ、ひな、ゆん、かおりたちに向き合う中、ピッピみたいな研究者・河野さ
んと再会し——？」

2) これまでに刊行された『虹いろ図書館』シリーズは、以下のものがある。

櫻井とりお『虹いろ図書館のへびおとこ』河出書房新社、2019

櫻井とりお『虹いろ図書館のひなとゆん』河出書房新社、2020

櫻井とりお『虹いろ図書館のかいじゅうたち』河出書房新社、2021

櫻井とりお『虹いろ図書館 司書先輩と見習いのぼく』河出書房新社、2022

櫻井とりお『虹いろ図書館 半分司書のぼくと友だち』河出書房新社、2023

2-3. 『銀河の図書室』1)

名取佐和子は、『図書室のはこぶね』2)で、学校図書館を舞台としたストーリーを描いて

いたが、その続編が発表された。

『銀河の図書室』も同じ高校の生徒や学校司書、司書教諭の人間関係や交流を扱っており、『図書室のはこぶね』にも登場していた「学校司書の伊吹さん」は、「野亜高校図書室の伝説の一つ」である。「伊吹さんは、図書室に収められた三万冊以上もの蔵書を全部読んでい」といわれているのは、「事実はどうあれ、歴代の図書委員達にそう思わせるベテランの静かな迫力」がある。「この野亜高校で三十年以上も働いているそうだ」。その間に「外部からも伊吹さん自身からも転任や定年の申し出が何度もあったけど、そのたび当時の司書教諭や校長、時には図書委員たちが動いて、奇跡の長期勤務が実現しているらしい」。「歴代の図書委員達にとっては伝説級の有名人である伊吹さんだが、遭遇場所がほぼ図書室に限定されるため、彼女の存在を知らないまま卒業していく生徒も多いだろう」(p. 43) という状況である。

現実の学校図書館では、自治体（都道府県・市町村）による違いも大きいですが、学校司書が配置されていなかったり、司書教諭が実質的な活動をしていないケースも存在する。学校司書の雇用条件に関しては、くわしくは表現されていないが、この小説では長期的に安定した雇用が定着している設定になっていると思われる。司書教諭について、現実には、学校図書館の活動にあまり関与しないケースも少なくないと思われるが、前作の『図書室のはこぶね』と担当者は変わっているが、本作でも、日常的に学校図書館の活動にかかわっている。

注

1) 名取佐和子『銀河の図書室』実業之日本社、2024. 8

<https://www.j-n.co.jp/books/978-4-408-53859-4/>

出版社である実業之日本社のホームページでは、「県立野亜高校の図書室で活動する「イーハトー部」は、宮沢賢治を研究する弱小同好会だ」。「今を生きる高校生たちの青春と、宮沢賢治の言葉が深く共鳴する感動長編」と紹介されている。

2) 名取佐和子『図書室のはこぶね』実業之日本社、2022

3. テレビドラマ『海のはじまり』1)

2024年4月から、月曜21時～、フジテレビ系列で『海のはじまり』が放映された。

このドラマでは、男性アイドルグループ「Snow Man」の人気メンバー「目黒蓮」が主演、脚本：生方美久、プロデュース：村瀬健、演出：風間大樹、というスタッフは、同じフジテレビ系列で2022年に放映された『Silent』2)と同じメンバーである。『Silent』では、会話によるコミュニケーションに難がある登場人物が、図書館内で手話によって対話するシーンが放映された。3)

『海のはじまり』では、目黒蓮が大学生時代に交際していた女性から、妊娠しているが、出産はしないと告げられ、同意書にサインをして病院にも同行する。その後、女性は大学を

やめ、ふたりは別れてしまうが、実際には、このときに女の子を出産していた。数年後にこの女性が亡くなったことを、大学時代の友人から聞き、目黒蓮は、亡くなった女性の母親から、実際に娘を出産して育てていたことを知らされる。この女性が、図書館に勤務しながら、一人で女の子を育てていた時、図書館に勤務していたという設定で、小田原市立中央図書館（旧名称：かもめ図書館）でロケが行われた。4)

図書館で撮影された場面で、登場人物について「司書として勤める」「同僚の司書」（『シナリオブック 上』p. 56）などの記述がシナリオには存在するが、資格や雇用形態、職業としての専門性などが、ドラマのストーリーの中で、詳しく扱われているわけではない。同僚の図書館職員のセリフでは、娘を出産して「3 か月くらいから」、この図書館で働き始め、「『妊娠中に講習受けて司書補の資格とったらしいです。そのあと働きながらすぐ司書の資格も取って』（『シナリオブック 上』p. 199）と紹介されており、後半の回想シーンでは、女性が図書館に勤務する初日に、同僚の男性職員に「『3 か月の女の子がいます』」といている場面がある。（『シナリオブック 下』p. 13）この女性は、大学を中退して、出産後は一部で母親の助けを借りながらも、図書館に勤務しながら、おおむね一人で、子どもを育ててきた、という設定になっている。資格に関しては、司書補から司書の資格を取得することは、大学に通わなくても、通信教育を受講するなどの方法もあり、不可能ではないが、金銭面や子育てにかかる時間、労力などを考えると、かなりの困難が伴うのも事実である。

第1話から最終話（第12話）まで、第1話を除いた回に、なんらかのかたちで図書館が登場するシーンが存在する。児童書のコーナーで職員が絵本を配架しているところに、女の子が絵本を手渡す（『シナリオブック 上』p. 56）、女の子が読み聞かせのコーナーで寝転んで絵本を見ている（『シナリオブック 上』pp. 198）、母の日に向けた展示の準備をしている（『シナリオブック 下』pp. 32-33）、児童コーナーで女の子が読んでもらう絵本を選んでいる（『シナリオブック 下』pp. 32-33）、など、母親が図書館に勤めていて、その人物がなくなってしまった後のストーリーということで、図書館でのシーンでは、児童コーナーが登場すること多い。また、図書館の休館日（シナリオでは水曜日の設定。ロケ地の小田原市中央図書館の休館日は、ほかの図書館でも休館に設定されていることの多い月曜日である）に、許可を取って中に入り、館内を駆け回ったり、女の子が、自分の母親がしていたように図書館員の役になって、貸し出し手続きのフリをしているシーン（『シナリオブック 下』pp. 194-196）もある。5)

注

1) 『海のはじまり』

<https://www.fujitv.co.jp/uminohajimari/>

2) 『silent』

<https://www.fujitv.co.jp/silent/>

3) 生方美久・脚本『silent サイレント シナリオブック完全版』扶桑社、2022

「図書館 二人から少し離れたところ。子供たちがうるさくして、司書に怒られている」
『おしゃべりして怒られてる』『図書館、静かにしないとだから』『私達はこうやってし
ゃべってても怒られない』『静かだからね』『あの子たちにも手話教えてあげようかな』
(pp. 218-219)

男の子が手の届かない高さにある本を取ってほしい、といって本を指さすと、その子を抱
き上げて本の前まで移動し、男の子が本を手にとって「ありがとう」と伝える。(pp. 240-241)
などのシーンが放映された。

4) 以下のような報告が、小田原市の「図書館からのお知らせ」に掲載されている。

「中央図書館（かもめ）が『海のはじまり』のロケ地になりました」

[https://www.city.odawara.kanagawa.jp/public-
i/facilities/library/liblaryinfo/p38745.html](https://www.city.odawara.kanagawa.jp/public-i/facilities/library/liblaryinfo/p38745.html)

ドラマの中で、図書館で仕事をしている登場人物の資格については、「y a h o o 知恵袋」
に質問が投稿され、それに対して、それぞれの回答者が、現在の図書館法の資格に関する条
文などを踏まえて、その質問に回答している。

https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q10302045455

https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q10304620305

5) 生方美久・脚本『海のはじまり シナリオブック完全版 上』扶桑社、2024

生方美久・脚本『海のはじまり シナリオブック完全版 下』扶桑社、2024

4. おわりに

これまで本誌に掲載された論考の中で、図書館との関係性について、さまざまな点から取
り上げてきた「長濱ねる」は、1) 千葉県木更津市にある「KURURU FIELDS (クルックフイ
ールズ)」内にある「地中図書館」2) を訪問したことを扱った記事の中で、「小さい頃から図
書館に行っていましたし、学生時代はよく図書室を使っていました。都内だけでなく、地方
で撮影がある際にはその土地の図書館に行くことも。公民館みたいなローカルさがある場
所も好きなんです」。「建築がかわいい図書館を訪れるために、オーストラリアまで行ったこ
ともあります！」としている。3)

この地中図書館は、日本にはほかに類似例が少ない、施設の一部が地中に展開されている、
入館料が必要な民間の図書館だが、誰でも無料で利用できる公立図書館では、近年、きびし
い地方の財政事情の中でも、新たな施設が建設されている例がある。その中でも、たとえば、
石川県立図書館を、NHK の番組が取り上げ、利用者に対して取材した模様が放映されている。

4) また、建築関係の雑誌で、図書館を扱った特集号が刊行されており、「2003 年の指定管理
者制度の導入によって、民間事業者による運営も増え」「これまでにない図書館運営のアイ
デアや、行政のコスト減などが期待される一方、司書らの待遇悪化や、重要な知のインフラ
を営利目的の企業に委ねることへの不安」などが指摘されている。5)

先の雑誌でもふれられているが、図書館職員の雇用に関しては、非正規公務員全般が話題になる中で、たとえば、近年、会計年度任用職員制度が導入されて、一定の年月が経過したのちの雇止めの事例として、「埼玉県狭山市の公立図書館で、二二年間、非正規の司書として働いた六〇代の女性が二〇二三年春に雇止めになった」。「専門職である図書館司書を正職員として採用しない傾向が強い」という事例が紹介されている。雇用保険の適用除外になる点や、公募の選考にあたって、それまでの業務評価が検討されないことなどが、問題として取り上げられている。6)

図書館職員の非正規雇用については、さまざまなところで問題視されてきているが、「図書館司書」に比べても、法的な整備が進んでいると思われる「心理職」について、「国家資格になったのに、非常勤職が多く、時給は低く、雇用も安定しない。専門職としてのアイデンティティが持てない。心理職の主体性や専門性が見えなくなっている」との指摘もなされている。7)

「図書館」という存在に関しては、「1. はじめに」で取り上げたように、図書館に関する話題が、さまざまな媒体に登場する機会は、メディアの多様化が進行しつつある現代においても一定程度、存在している。今回とりあげた図書館について扱っているフィクションの作品を継続的に発表している事例以外にも、たとえば、2025 年の大学入学共通テスト「情報」(旧課程)の問題に、高校の図書委員会が学校図書館の利用活性化に取り組むという設定での文章が示され、それに関係する問題が出された。8) 図書館に関して、社会的に一定の関心が存在している、ということをあらわす事象が、さまざまな局面で出現しているといっているのではない。

他方、海外の事例ではあるが、『スマートシティはなぜ失敗するのか 都市の人類学』では、「知識インフラとして、同時に社会インフラとして機能している図書館」について「高度な技術を装備した都市の」「社会的弱者に、きわめて重要なサービスを提供している」と指摘している。9)

今回取り上げたフィクションの作品では、図書館の職員の雇用状況やその扱われ方について、具体的な体験を踏まえて記述されている例があった。フィクションの作品ということで、司書資格取得を考慮する(『ちゃっけがいる移動図書館』、『海のはじまり』)、指定管理者制度の導入後もその撤回を目指して啓蒙活動に取り組む(『虹いろ図書館 司書のぼくと運命の一年』) など、ポジティブなストーリー展開もみられたが、現実との違いはあるにせよ、図書館を取り巻く現在の状況が今後どのように変化し、それがフィクションの作品にどのように描かれていくのか、今後もしばらくは注視していきたいと考えている。

注

1) 「長濱ねると図書館」佐藤毅彦「2020 年 コロナウイルスと図書館状況と図書館小説」『甲南国文』vol. 68、2020. 3

<https://www.konan-wu.ac.jp/~nichibun/kokubun/68/sato2021.pdf>

「長濱ねると図書館・続」佐藤毅彦「2021 年 コロナウイルスの拡散が継続する中での図書館状況と図書館小説」『甲南国文』vol. 69、2021. 3

<https://www.konan-wu.ac.jp/~nichibun/kokubun/69/sato2022.pdf>

「長濱ねると図書館・みたび」佐藤毅彦「図書館をめぐるメディア状況の現在地——2022 年の実情について」『甲南国文』vol. 70、2022. 3

<https://www.konan-wu.ac.jp/~nichibun/kokubun/70/sato2023.pdf>

いずれも、論考の冒頭部分でとりあげた。

2) 「クルックフィールズ」については、「『農』と『食』と『アート』が融合した複合施設」のように、紹介されている。

https://www.timesclub.jp/sp/tanomachi_ex/chiba/kisarazu/004.html

「地中図書館」は、「木や草花が生い茂る土の下に、ひっそりと隠されたように存在し、洞窟のように横たわる地中図書館」「自然の叡智を学びながら、想像力を浮いたかに未来へと向かう、そんな人々の支えになるような場所を目指します」と紹介されている。

なお、入館には、メンバー登録と予約が必要となっている。

<https://kurkkufields.jp/experience/library/>

下記のサイトでは、地中図書館のコンセプトが紹介され、写真も多数公開されている。

<https://www.nakam.info/jp/works/library-in-the-earth/>

3) 「長濱ねると地中図書館へ。小さい頃も学生時代も、よく図書館を使っていました」『MEN 'S NON-NO』2024. 3. 3

<https://www.mensnonno.jp/lifestyle/439312/area04/>

4) 「金沢 大きな図書館で」『ドキュメント 72 時間』2024. 8. 30

「劇場のような館内に無数の本が並ぶ」「金沢市にある石川県立図書館。2 年前に建て替えられ、連日多くの人々が足を運ぶ。おしゃべりが OK というルールで、声をかける取材に許可が下りた」と紹介されている。

なお、この番組については「毎回、ひとつの現場にカメラを据え、そこで起きる様々な人間模様を 72 時間にわたって定点観測するドキュメンタリー番組。偶然出会った人たちの話に耳を傾け、“今” という時代を切り取ります」とされている。

<https://www.nhk.jp/p/72hours/ts/W3W8WRN8M3/episode/te/RN23K569VR/>

5) 『建築ジャーナル』2024 年 9 月号

「特集 図書館の自由」が掲載された。表紙には、「ネットの普及による紙媒体の衰退」「全国の自治体の約 4 分の 1 で書店が消滅」などの事実のあと、「知の源泉である図書を収集し、これまで市民に開放してきた図書館の在り方も変化している」とし、「オフィスやイベントスペースを併設する複合図書館が増加」「2003 年の指定管理者制度の導入によって、民間事業者による運営も増えてきた」「これまでにない図書館運営のアイデアや、行政のコスト減などが期待される一方、司書らの待遇悪化や、重要な知のインフラを営利目的の企業に委ねることへの不安の声も聞こえる。変化の渦中にある図書館の意義と、その器としての

建築の在り方について今あらためて考えてみる」(p. 2) とある。

この雑誌には、下記のような記事が、掲載されている。

永利和則、比嘉武彦、松隈洋「巻頭鼎談 図書館の自由と図書館建築」 pp. 4-7

仲村拓真「図書館の歴史 公共図書館の軌跡を辿る」 pp. 8-11

永利和則「指定管理者制度を考える 指定管理者制度と公立図書館」 pp. 12-13

和久田幸佑「公共図書館の原点 日野図書館とひまわり号」 pp. 14-15

斎藤信吾「図書館建築をめぐる 神奈川県立図書館 そだてる建築をめざして 神奈川県立図書館の前川國男館」 pp. 16-17

堀田隆斗「図書館建築をめぐる 水戸市立西部図書館 水戸市立西部図書館から見るこれまでとこれからの図書館建築」 pp. 18-19

菊池尊也「図書館建築をめぐる 宮城県図書館 検索と散策が混じる場所」 pp. 20-21

葛谷寧鵬「図書館建築をめぐる 多摩美術大学図書館 作品としての図書館からみる展望」 pp. 22-23

水島信「アルヴァー・アアルトの図書館 見聞備忘録」 pp. 24-27

植田佳宏「コラム 文化船「ひまわり」が島に運んだもの」 pp. 28-29

坂本旬「映画『パブリック図書館の奇跡』から再び考える」 pp. 30-31

内山媛理「小説にみる図書館 静寂の中に秘められたイメージ」 pp. 32-33

萬谷ひとみ「コラム だれでも楽しめる図書館のために」 pp. 33-34

石井裕子「コラム 公設・私設の図書館経験から感じたそれぞれの「自由」」 pp. 35-36

宮崎一徳「コラム 一箱本棚オーナー制度図書館「みんとしよ」のすすめ」 pp. 36-38

6) 東海林智『ルポ低賃金』地平社、2024. 4、pp. 186-191

7) たとえば、公認心理士法に規定されている心理領域の専門職「公認心理士」についても、きびしい状況にあることが指摘されている。司書資格に比べても、手厚い制度になっていると思われる領域の専門職についての実態に対する関係者のコメントに接して、図書館司書を取りまく状況に関して、希望が持てる未来を思い描きにくいのも確かである。

『講座 臨床心理学』(全6巻 東京大学出版会 2001～2002)、『現代の臨床心理学』(全5巻 東京大学出版会 2022～2023)の編者、東京大学名誉教授で、跡見学園女子大学文学部臨床心理学科・下山晴彦教授の著書『心理職は「ときめき」を取り戻せるか 臨床心理学の専門性を基軸として』2024 では、「かつて心理職はときめいていた」「心理職であることにプライドを持ち、未来に希望を持っていた。心理職には「ときめき」があった」。「2015年に公認心理士法が成立し、臨床心理士ではなく、公認心理士としての国家資格がスタートした」一方で、「国家資格になったのに、非常勤職が多く、時給は低く、雇用も安定しない。専門職としてのアイデンティティが持てない。心理職の主体性や専門性が見えなくなってきた。このような状況の中で心理職は、「ときめき」を失った」と記述されている。

下山晴彦『心理職は「ときめき」を取り戻せるか 臨床心理学の専門性を基軸として』東京大学出版会、2024、pp. i - ii

8) 「大学入学共通テスト本試験問題」『毎日新聞デジタル』 pp. 74-81

<https://mainichi.jp/exam/kyotsu-2025/q/?sub=INF38>

「ある高校の図書館では最近、図書の貸出数が少なくなり、また、生徒の来館数も減っている。そこで、図書館利用の活性化を通じて生徒に読書習慣を身につけてもらうための案を図書委員会で検討することになった」という設定で、この状況に対応するための問題が出されている。

9) シャノン・マターン、依田光江訳『スマートシティはなぜ失敗するのか 都市の人類学』早川書房（ハヤカワ新書）、2024. 10、p. 31

「図書館が、デジタルにとらわれない聖域となり、信頼性のある情報を選びわける知識のフィルター、プライバシー意識の先導、市民データの保管庫、オープンアクセスの資料や公益技術の擁護者として、いかに重要で革命的な役割を果たすのか、また果たしうるのかを検証する」。「本書をつうじて伝えたいのは、スマートシティに住む人たちにもっと図書館を気にかけてほしいということだ」としている。

（本文中で参照した web ページは、2025 年 1 月の時点で公開されていたものです。）